

【姫路反戦意思表示行動のご紹介】

## 平和街角興行やっています



純野小

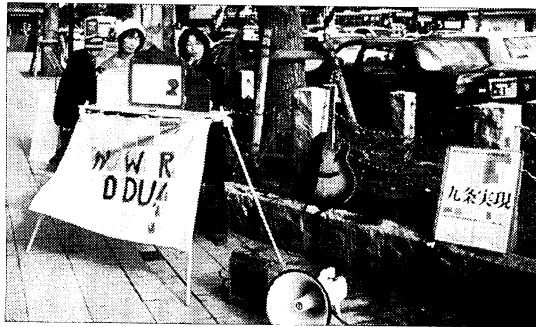
## ★ はじまりはじまり ★

2006年1月15日、日曜日、午前10時15分、小野・久貝が車で中村宅までお出迎え。今日はいつもより荷物が多いので。10時30分山陽電車姫路駅前に到着、荷物をおろしていつもの歩道で設営にかかる。しかし紙芝居を忘れてきたことを発見、あわてて小野が取りに帰る、トホホ。いつもは11時開始だが今日は少し遅くなる。11時15分、山本の舞踏開始。Native Musicをバックに、赤い着物をひらめかせて自由に踊る。何事かと立ち止まる人たち。中島・北田が「平和街角かわら版」を、チラシまき。11時40分、平和街角興行バンドの歌。久貝、平和への想いを前説、「さとうきびばたけ」「死んだ男の残したものは」。11時50分、ヴォーカル三上、中村・小野伴奏で新谷のりこの「七曲がり恋唄」「憲法9条の歌」。中年のおじさんおばさんたち、立ち止まって聴いている。12時、中村がウクレレ弾き語りで加川良「教訓1」をひょうひょうと唄う。聞けば、つじあやの、ならぬ「つじあやういの」としてのソロデビューを前にして、今朝から相当緊張していたとか。12時5分、村井の語りで松田妙子作、紙芝居「あかずきんちゃん気をつけて」開演。赤ずきんちゃんが知り合の日本国憲法さんのお見舞いに行くと、

実は狼の憲法さんが九条を変えようとしていて、その正体が明らかになったとたん、赤ずきんちゃんのずきんが、「防空ずきん」に変わってしまったという傑作。必笑、必見。ギャラリーに大西夫妻の顔見える。12時15分、野瀬が自作の詩「アメリカを救おう」朗読。皮肉と諧謔に満ちた詩。12時25分、再び平和街角興行バンドの唄。「イムジン河」「Imagine」久貝の唄声駅前に響く。携帯で写真を撮る青年、立ち止まり耳を傾ける人たち。12時30分、1月の平和街角興行は、盛りだくさんのプログラムで無事終了。みんなで反省会兼お昼ご飯に移動。

## ★ 消費者から生産者へ ★

右を見ても左を見ても、大量の商品があふれた社会に暮らしている私たち。生きることが、消費することと同義になってしまった私たちの生活。「賢い消費者」になることが、「良いものを選択すること」が、ニンゲンとしての正しいあり方になってしまった現代ニッポン。モノだけでなく、映画も小説も音楽も、感動まで消費される商品としてあふれかえっている。だけど、結局のところ私たちは、生産する側の都合のいいように操られているのでは？ 選んでいるようでいて、実は選ばざらされているのでは？ 消費するのはもちろん楽しいけれど、生産するこ



とはもつと楽しいのでは？ つくる側にまわって見たらどうだろう？ それは夢だろうか？ 現に無農薬有機野菜の農家や、家具職人やらを志す人も多い。

市民運動でも、同じ事が起こっていないか？ 自分の主張にあいそうな集会选择んで出かけ、講演者の話に相づちを打つ。拍手する。いろんな運動の通信を読む。腹を立てたり、共感したりする。記録映画や芸術作品を鑑賞して涙を流す。それはそれで必要だし、受け手としての意味もある。でも、そこで私たちは「お客さん」でしかない、消費する側。まして私のように地方都市に住んでいると、市民運動の集会和映画会そのものがない。必然的に、自分でやるか、何もせずに黙

っているか、どちらかを選ばざるを得ない。市民運動の消費者から生産者に、立場を変えるといろんな発見や刺激がある。けれど、何かをつくるために動き

出す時は、やはりとんでもないしんどきをとまなう。それを乗り切るのに必要なものは、「仲間」と「楽しさ」じゃないかと思う。まず、一人ではなかなか動き出せない。孤独はつらいし、相談することいいアイデアも出てこようというもの。仕事も分担できるし。それから、しんどいばかりじゃ続けられないから、自分が楽しめるようなことを考える。参加する人が楽しめるようにするのもいい。そういうふうには、いろいろ考えること自体が楽しい、ということもある。

さて、02年の終わり頃から、ブッシュはしきりとイラク侵攻をほのめかし始め、もはや開戦は避けられない雰囲気があった。よいだしした時、アフガニスタンでは抗議の声をあげず悔しい思いをしていた。ぼくは、今度こそ何かをしなければと考えていた。そして03年3月、とうとう米軍のイラク侵略が始まった。黙ってても、誰も何もしてくれない。自分の意志は自分で表明するしかない。でもぼくにできることは？ つれあいの久貝と話し合っ出てきた結論は、駅前でサイレントアピールに立つ事。知人の沖中氏と三人で、毎日曜日山陽電車姫路駅前に立つ。ぼくは爆撃で死んだイラクの子どもの冥福を祈って喪服、他の二人も黒服、抗議のために思い思いのパネルを持つ。BGMに Imagine。後に和太鼓奏者も加わり、



イラク戦争に静かな抗議をする。4月以降参加者徐々に増え、最大6人の時も。BGMに爆撃音の効果音が入る、ニールヤングの「風に吹かれて」などを流す。このサイレントアピールは「戦争終結」後も続け、結局5月の連休で一応の終止符を打つ。このアピールの最大の収穫は、中村雅子さんという若い仲間を得たこと。1950年生まれのぼくににとっては、ようやく後に続く世代に出会えたうれしさがある。

やがて03年12月、自衛隊のイラク派兵決定。とうとう戦後初めて実戦部隊が外国に派兵されることになった。これには絶対抗議せねば、ということ集会をやることに決める。さらに村井、坂田、中島さんなどの女性が仲間に加わる。2004年2月、Peace Project 2004「ARTで表現——私の平和」を開催する。イラク派兵への抗議、平和への想いを、声高な演説や集会アピールではなく、歌や写

真・絵画・書などで表現しよう、自分の持っている表現手段で、と。約五十人の参加者があり、盛り上がる。

### ★ 書を捨てよ、街へ出よう ★

「ARTで表現——私の平和」の成功に気をよくして、今度は外でやろう、屋内の閉じた空間で集会参加者という限られた人だけにメッセージを届けるのではなく、もつとたくさんの人たちにぼくたちの声を聞いてもらいたい。通りがかりの人に、イラクのこと、憲法のこと、平和のことを伝えたい。僕らなりの表現で。こんな人間が、ここ姫路にもいることを、知ってもらいたい。一緒に声をあげてもらいたい。久貝、中村、ぼくの三人で話し合い、このアピールのタイトルを「平和街角興行」と名付ける。ちよつとレトロでいい感じ？ ARTで表現の参加者に呼びかけるが、なかなか演者集まらず。こくなつたら自分たちでやっちゃまえ！ こうして久貝ヴォーカル、中村ヴァイオリン、小野ギターの「平和街角興行バンド」結成。04年6月おなじみ山陽電車姫路駅前で最初の興行。「イラクの子どもを救う会」の西谷さんが写した、劣化ウラン弾で被害を受けたイラクの子どもたちの写真パネルを展示する前で、高砂舞踏協同組合の面々が踊る。9月沖繩から稼げに來ている関西人？野瀬さんが加わり、

自作の詩を読む。辺野古のパネルなどを展示。その後単発ながら若者二人の歌での参加、和太鼓、三線、紙芝居、飛び入りのヴォーカル、自作の9条シールを配る女性など多士済々のメンバーで現在まで続く。当初の想いは、とにかく自衛隊が日本に帰ってくるまでは絶対に続ける、だったのだが、どうやらその可能性が見えてきた現在、平和街角興行をそのあとどうするか。憲法改悪が目前にまで迫った今、どうするのか。仲間たちと相談をしてこれから決めていきたいと思う。さてここで、1月15日の興行を終えた参加者の一口コメントを。「親になぜ前の戦争に反対しなかったのかと尋ねた、今度は自分の番が来たと思う」中島。「お母さんは戦争に反対したんだと子どもに言える自分でいたい」北田。「生きていることが楽しめるようなシーンをつくりたい」山本。「私自身が自由に平和に生きていることを表現したい」久貝。「平和な世の中をつくりたい、継続は力なり」村井。「戦争の発作にK9錠、アメリカを救おう」野瀬。「もう一年半も続いている、いろんな人の目に触れられる場を大事にしたい」中村。「9条の歌を唄う場所が出來て楽しいし、うれしい」三上。

### ★ 生の拡充 ★

久貝のヴォーカルや中村さんのヴァイ

オリンはいいとして、70年代の学生時代に自己流のギターをジャカジャカかき鳴らしてただけのぼくが、伴奏とはいえ人前でギターを弾くなんて、とてもこっぴどくかしくて出来ないと思つてたけど、やってみるとこれが意外に楽しい。練習も目的があると気合いが入るし、弾けなかつたコードチェンジが出来るようになる、達成感もある。久貝もどん声が出るようになってきた。

結局のところぼくたちのやっていることは、平和の名を借りた自己満足じゃないか、そんなことで何も変わらない、という批判もあり得ると思う。でも、ぼくたちは唄うことで、平和を願つて唄うことで、ぼくたちが生きていることを表現している。ぼくたちの生がもつと拡がるように、感性を伸ばしている。ぼくたちの生がもつと充実するように、努力している。街角で、平和について自由にうたを唄えること、詩を読めること、踊れること、そのことを楽しみたい。その中にぼくたちの生が本来持つている歓びを発見したい。それは戦争とは対極にある。ぼくはぼくを耕す、ぼくはぼくを掘りかえず、ぼくはぼくをさらけ出す。そこに何があるか。

(おの・じゅんいち、姫路平和街角興行)